

# 現代の英語科教育法

石山赤北 黒内松林 昭信信利 博幸彦治

英 宝 社



## はしがき

最近の英語教育をとりまく社会状況は、めまぐるしい変化を遂げています。小学校での英語教育の導入、実践的コミュニケーション能力の養成を謳う新学習指導要領の実施、カリキュラム上の外国語科の必修化、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール構想による英語教育の重点化の試みなど、枚挙にいとまがありません。また、従来から、さまざまな教授法が開発されてきて、IT革命をともなった教育機器の刷新も日進月歩のあります。

本書は、将来、中学・高等学校の英語教員を目指す人たち、及び現職の中学校・高等学校の英語教員の方々のために必要とされるさまざまな情報や知識を手際よくまとめ、英語科教科教育法や教育実習などの英語教育関係の授業、ならびに教育の現場で活用するために編まれたものです。限られた時間のなかで効率よく過去の知見を吸収し、さらに、教育の現場において生きた知識として役立つように配慮されています。

従来の類書には、教授法の解説を主とした理論に重きをおいたもの、実際の授業運営の具体例を集めた実践に重点をおいたもの、あるいは、教育実習のノウハウに焦点を当てたものなど、ある1つの基軸にしたがって執筆されているものが多く見られました。それにたいし、本書は、いわば、教育現場における理論的背景と実践的知識の融合を目指したもので、英語科教科教育法プロパーのテーマだけにとどまらず、英語を学ぶ者として最低限必要とされる「英語に関する基礎知識」や教室で直面する問題にたいする実践的なノウハウを集めた「Q & A」などによって、多方面からの要求にもこたえることができるよう配慮されています。また、付録では、教員採用試験実例、英語科学習指導案実例、学習指導要領を添付し、利用者のニーズに供する工夫がなされていますが、この点にも、本書の特長がいかんなく發揮されています。

## 現代の英語科教育法

本書の執筆にあたっては、第1次草稿の一部を、人間環境大学の岡良和先生と徳島文理大学の堀口誠信先生に準備いただきました。執筆者は何度も改稿をもちより、教育実践の原点である創意工夫を生みだすべく、検討を重ねてまいりました。本書には、できる限り最新の研究成果を盛りこむように努力しましたが、著者たちの浅学菲才からくる思わぬ誤解もあるやにしれません。読者諸兄姉のご叱正をお願いする次第です。

最後になりましたが、本書の企画段階から刊行にいたるまで、英宝社宇治正夫氏から絶えず暖かい励ましをいただきました。ここに記して、著者一同の感謝の気持ちを伝えたく存じます。

2002年9月

著者一同

# 目 次

はしがき .....	iii
<b>第Ⅰ章 英語教育の目標 .....</b>	<b>3</b>
1. 英語学習の意味 .....	3
1.1. 英語学習の2つの意味 .....	3
1.2. 実用論と教養論 .....	5
2. 学習指導要領 .....	6
2.1. 学習指導要領とは .....	6
2.2. 新学習指導要領の特徴 .....	7
3. コミュニケーション能力とは .....	8
4. まとめ .....	10
Q & A その1 .....	11
<b>第Ⅱ章 英語に関する基礎知識 .....</b>	<b>12</b>
1. 英語の背景 .....	12
2. 世界の諸言語 .....	14
3. 英語の現況 .....	18
3.1. 国際的共通語としての英語 .....	18
3.2. 母語（第1言語）としての英語 .....	18
3.3. 第2言語としての英語 .....	19
3.4. 地球語としての英語 .....	21
4. まとめ .....	22
Q & A その2 .....	23
<b>第Ⅲ章 英語教授法の変遷Ⅰ .....</b>	<b>24</b>
1. 文法訳読法 .....	24
2. 直接教授法 .....	26
2.1. ナチュラル・メソッド .....	26

## 現代の英語科教育法

2.2. 心理的教授法.....	28
2.3. 音声学的教授法.....	30
2.4. スウィートとイエスペルセン.....	32
3. リーディング教授法 .....	35
4. GDM .....	36
5. オーラル・メソッド .....	37
6. ASTP.....	42
7. まとめ.....	43
Q & A その3 .....	44
<b>第 IV 章 英語教授法の変遷 II .....</b>	<b>45</b>
1. オーラル・アプローチ .....	45
1.1. オーラル・アプローチの理念.....	45
1.2. オーラル・アプローチの方法.....	47
2. オーラル・アプローチにたいする批判 .....	49
3. コミュニカティブ・アプローチの発展 .....	51
4. 最近の教授法 .....	52
4.1. Community Language Learning.....	52
4.2. Suggestopedia .....	53
4.3. Silent Way .....	53
4.4. Total Physical Response (TPR) .....	54
4.5. Natural Approach.....	55
5. まとめ.....	58
Q & A その4 .....	59
<b>第 V 章 リスニングの指導 .....</b>	<b>60</b>
1. 英語の音声的特徴 .....	60
1.1. 音体系.....	60
1.2. 音の変化.....	61
1.3. 強勢アクセント .....	61
1.4. 音調.....	61
2. リスニングの活動様式とその目標 .....	62
2.1. リスニングの位置づけ.....	62
2.2. リスニングの諸相.....	62

2.2.1. 集中的リスニング .....	62
2.2.2. 選択的リスニング .....	63
2.2.3. 包括的リスニング .....	64
2.2.4. 相互作用的リスニング .....	64
2.2.5. 対人的リスニング .....	65
<b>3. リスニングの指導プロセス .....</b>	<b>65</b>
3.1. リスニングの前活動 .....	65
3.2. リスニング活動 .....	67
3.2.1. 理解度の確認 .....	67
3.2.2. ディクテーション .....	67
3.2.3. 文章復元法 .....	68
3.2.4. 通訳法 .....	68
3.2.5. 全身反応法 (Total Physical Response) .....	68
3.2.6. シャドウイング .....	68
3.3. リスニングの後活動 .....	69
<b>4. まとめ .....</b>	<b>69</b>
<b>Q &amp; A その 5 .....</b>	<b>70</b>

<b>第 VI 章 スピーキングの指導 .....</b>	<b>71</b>
<b>1. 知識と技能 .....</b>	<b>71</b>
<b>2. スピーキングのための技能 .....</b>	<b>72</b>
2.1. Oral Skill .....	72
2.2. Production Skill .....	72
2.3. Interaction Skill .....	73
<b>3. スピーキングにおける文法の役割 .....</b>	<b>74</b>
3.1. 意味的要因 .....	74
3.2. 談話的要因 .....	75
3.3. 社会的要因 .....	75
<b>4. スピーキングの指導 .....</b>	<b>76</b>
4.1. スピーキング指導の学習活動 .....	77
4.1.1. Describing Pictures .....	77
4.1.2. Pictures Differences .....	77
4.1.3. Things in Common .....	77
4.1.4. Problem Solving .....	78
4.1.5. Long Turns .....	78

## 現代の英語科教育法

4.1.6. Role Playing .....	79
5. まとめ .....	79
Q & A その 6 .....	80
<b>第 VII 章 リーディングの指導 .....</b>	<b>81</b>
1. 「読む」とは .....	81
1.1. 読解過程 .....	81
1.1.1. ボトムアップ処理 .....	82
1.1.2. トップダウン処理 .....	82
1.1.3. ボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用 .....	83
1.2. 読解習得 .....	84
2. 第 2 言語・外国語におけるリーディング .....	85
2.1. 単語認識の重要性 .....	86
2.2. 第 1 言語の影響 .....	86
3. リーディングの指導 .....	89
3.1. ボトムアップ処理重視の指導 .....	89
3.1.1. 新出単語の学習——音・意味・綴りのワンセット .....	89
3.1.2. ボトムアップ処理重視の学習活動 .....	91
3.2. トップダウン処理重視の指導 .....	92
3.2.1. 読解方略 .....	92
3.2.2. メタ認知能力の重要性 .....	93
3.2.3. トップダウン処理重視の学習活動 .....	94
3.2.3.1. リーディングの前活動 .....	94
3.2.3.2. リーディングの後活動 .....	95
4. まとめ .....	95
Q & A その 7 .....	96
<b>第 VIII 章 ライティングの指導 .....</b>	<b>97</b>
1. ライティングの基礎となる能力 .....	97
1.1. 言語能力の基礎 .....	97
1.2. ライティングと語彙 .....	99
1.3. 和文英訳とライティング .....	99
2. 学習指導要領におけるライティング .....	102
3. ライティング指導の実際 .....	103
3.1. パラグラフ・ライティング .....	103

3.2. 要約と意見 .....	105
3.3. 場面や目的に応じた伝達 .....	106
3.4. ライティングのプロセス .....	106
4. ライティングの添削 .....	108
5. まとめ .....	108
Q & A その 8 .....	109
<b>第 IX 章 語彙の指導と辞書活用法 .....</b>	<b>110</b>
1. 語彙習得の方法 .....	110
1.1. 基本語彙の選定 .....	110
1.2. 語彙習得の方法 .....	111
2. 語彙の構造と意味 .....	112
3. 基本語彙の習得 .....	113
3.1. 基本語彙の習得 .....	113
3.2. メタファーとメトニミー .....	115
4. 語彙の習得と母語の影響 .....	116
4.1. 日本語と英語の意味のずれ .....	116
4.2. 単語のイメージ .....	117
5. 辞書と語彙の指導 .....	118
5.1. バイリンガルの辞書 .....	118
5.2. 英英辞典の意味の記述 .....	119
5.3. 辞書指導 .....	119
5.4. いくつかの英英辞典 .....	121
6. まとめ .....	124
Q & A その 9 .....	125
<b>第 X 章 文法の指導 .....</b>	<b>127</b>
1. 文法指導の必要性 .....	127
2. 文法指導のあり方 .....	128
2.1. 演繹的指導と帰納的指導 .....	129
2.2. EFL と ESL .....	129
2.3. 形式と意味 .....	130
2.4. 正確性と流暢性 .....	131
3. 文法指導とコミュニケーション指導の関係 .....	133

## 現代の英語科教育法

3.1. Integrated Option .....	133
3.2. Parallel Option .....	134
4. 文法指導の実際 .....	135
4.1. 基礎的な文型練習 .....	135
4.1.1. Mim-Mem (Mimicry-Memorization) .....	135
4.1.2. Pattern Practice .....	135
4.1.3. Substitution Drill .....	136
4.1.4. Open Sentence Practice .....	136
4.1.5. Conversion .....	136
4.1.6. Memory Test .....	137
4.2. コミュニケーションのための発展的な諸活動 .....	137
4.2.1. Information Gap Filling .....	137
4.2.2. Interview .....	137
4.2.3. Find Someone .....	137
4.2.4. Matching Game .....	138
4.2.5. Questionnaire .....	138
4.2.6. Find the Difference .....	138
4.2.7. Skit .....	139
5. まとめ .....	139
Q & A その 10 .....	140

第 XI 章 テスティングと評価 .....	141
1. テストの種類と目的 .....	141
1.1. 熟達度評価試験 .....	141
1.2. 能力判定試験 .....	142
1.3. 診断テスト .....	142
1.4. 適性試験 .....	143
2. テスト作成及びテスト使用における留意点 .....	143
2.1. 信頼性 .....	143
2.2. 妥当性 .....	144
2.2.1. 内容妥当性 .....	144
2.2.2. 構成概念妥当性 .....	145
2.3. 総合性 .....	145
2.4. 実用性 .....	146
2.4.1. 経済面 .....	146
2.4.2. 採点面 .....	146

## 現代の英語科教育法

4. 英語教師として .....	178
5. まとめ .....	179
Q & A その 13 .....	179
付録 I 教員採用試験実例 .....	185
付録 II 英語科学習指導案 .....	197
付録 III 学習指導要領 .....	200
参考文献 .....	217
索引 .....	223

3. 4技能を測るテスト .....	147
3.1. Integrative Test vs. Discrete-Point Test .....	147
3.2. Listening Test .....	147
3.3. Speaking Test .....	149
3.4. Reading Test .....	149
3.5. Writing Test .....	151
4. テスト結果の評価 .....	151
5. まとめ .....	152
Q & A その 11 .....	153
 第 XII 章 指導補助手段 .....	154
1. 指導補助手段の役割 .....	154
1.1. 教師の役割 .....	154
1.2. 「補助」の概念 .....	155
2. 指導補助手段の特徴 .....	156
2.1. 視覚に訴えるもの .....	156
2.1.1. 黒板 .....	156
2.1.2. フラッシュ・カード .....	157
2.1.3. 写真・絵・図表 .....	158
2.1.4. オーバーヘッド・プロジェクター (OHP) .....	159
2.2. 聴覚に訴えるもの .....	159
2.2.1. テープ .....	159
2.2.2. LL .....	160
2.2.3. 各種デジタル機器 .....	162
2.3. 視聴覚に訴えるもの .....	163
2.4. 人的サポートによるもの .....	165
3. まとめ .....	167
Q & A その 12 .....	168
 第 XIII 章 教師と英語教育学 .....	170
1. 複雑な研究対象 .....	170
2. 北米における教育研究方法の推移 .....	172
3. 研究と実践の隔たり .....	175
3.1. 教育研究が実践にかかわる度合い (教育研究者側の問題) .....	176
3.2. 教育研究成果へのアクセス (教育実践者側の問題) .....	177

# 現代の英語科教育法



## 第Ⅰ章

### 英語教育の目標

1998年に改訂された『中学校学習指導要領』、及び翌年に改訂された『高等学校学習指導要領』で、外国語が必修科目として位置づけられた。ますます進展する国際化のなかで、学校教育として英語を教える意味は高まっている。この章では、「英語をなぜ学ぶのか」という根本的な問い合わせから始めて、学校英語教育の基本にある『学習指導要領』の精神の理解に努めたい。

#### 1. 英語学習の意味

##### 1.1. 英語学習の2つの意味

将来、教壇に立ったとき、生徒から「英語をなぜ勉強しなければならないのか」と問われたら、いったいどう答えたらいよだろうか。英語教育の目的は、社会の変化、時代の要請によって変わっていくという点に注意する必要があるし、その生徒1人ひとりによっても英語を学ぶ意味は違っているだろう。ただ、大きくわければ、英語を学ぶ意味には2つあると考えられる。

何よりもまず、英語は、現在、唯一の国際語であるという事実がある。まず、話し手の数が多い。次の章で詳しく見るよう、英語には、(1)母語としての英語 (English as a native language), (2) 第2言語としての英語 (English as a second language), (3) 外国語としての英語 (English as a foreign language) という3つの側面がある。そして、それぞれの話者は、母語としている人たちが4.5億人、第2言語として使っている人たちが3.7億人、外国語として使える人たちが、12~15億人であると見積もられている。その上、これらの英語の話し手は1ヶ所にかたまっているのではなく、全世界に散らばっている。

英語は、さらに、地球的規模で、政治、経済、文化、学術の交流を初め

## 現代の英語科教育法

とする目的で用いられている。英語という言語の使用上の特徴は、英語の広がりを支えている人たちが、英語の非母語話者であるという事実である。これまで、外国語としての英語という場合、コミュニケーションの相手は、英語の母語話者という前提があり、英語を通じて、欧米先進国の文化を吸収することが目的であった。また、コミュニケーションといつても、その相手は、英語を母語とする人たちが念頭にあったと思われる。しかし、今日、国際化の時代を迎えて、母語が異なる人たちのあいだでのコミュニケーションの手段としての英語という、英語の新しい側面が強調されるようになった。たとえば、お互いに母語が異なる人たちが集まっている場面を考えてみよう。彼らは、まず、英語で話し始めるであろう。このように、英語の実践的コミュニケーション能力を身につけることは、世界に開かれたいいろいろな人々との交流を可能にする能力を身につけるということになるのである。

もう1つの英語を学ぶ意味は、英語という言語をとおして、異文化を学び、また、それによって、自国の文化の気づかなかつた新しい側面が見える、という点にある。1つ例を見てみよう。次の抜粋は、大佛次郎の『帰郷』からである（北林・杉山・ボナン・西村、1998）。

- (1) 「如何です」  
と、画家は連れを返り見た。  
「なかなか景色の好いところでしょう」

「如何です。なかなか景色の好いところでしょう」という画家のモノローグが、英訳では次のようにになっている。

- (2) “What do you think of it?” the painter turned and asked his companion.  
“Oh,—I think it’s a beautiful sight,” she answered.

この翻訳では、「どうですか」という画家の問い合わせにたいして、連れが「美しいですね」と答える対話の世界へと変えられてしまっている。画家のモノローグの世界が誤訳されて、画家と連れの対話の世界に変わっている。翻訳者はなぜ誤訳してしまったのだろうか。「如何です」と画家に問われて、

黙っているのは英語の会話としては不自然である。やはり、「よい景色ですね」と答えるほうが英語の会話として自然である。英語の文化背景をこの「自分」と「相手」の対話のなかにうかがうことができる。「自分」と「相手」との対話をおこないつつ、自分の意見で相手を説得していくという文化である。英語を学ぶことによって、このような言語の背後にある文化的基盤を考える機会が与えられ、異文化でコミュニケーションをするとはどういうことかという問題を学習者は考えることになる。

### 1.2. 実用論と教養論

明治時代以来、外国語を学ぶということは、欧米の文化・文明を理解するという目的があった。英語教育に教養的価値と実用的価値の2面があるということが主張された。教養的価値とは、異文化の理解をとおして、文化の相対性を学習者に気づかせ、また、日本語と異なる言語に触れることによって知的刺激を与えるということである。一方、実用的価値とは、英語を媒介として、西欧のさまざまな情報を得ることである。

実用論の立場に立てば、中学・高等学校と6年間も英語を学びながら、その成果は、学習した英語をほとんど読めず、書けず、聞けず、話せずというのが実情で、学校で学んだ英語は何の役にも立たない、という批判につながる。これらの意見を唱える人たちのなかには、英語を義務教育の対象とするのは無理があり、英語を志望者だけが選択する科目と位置づけ、そのかわり、その少数の学生には、集中的な訓練によって英語の実際的能力をもたせることが望ましいという意見の人たちもいる。

一方、教養論に立つ人たちは、英会話ができるることは、語学の1つの側面にすぎず、内容ある英語の文章を的確に理解することが外国語を学ぶ目的であると指摘する。学校における英語教育は、将来必要に迫られれば、着実な英語力が伸びるようにその土台を与えることであると主張する。

つまり、実用論とは、英語が聴け、ビジネスの場で英語を用いて商談をまとめたりできる程度におけるコミュニケーション能力をつけるように教育すべきであるという考え方である。一方、教養論は、英語教育によって、学習者の人格を高め、知性を磨くことを主要目的として、英語の潜在的な能力を身につけさせるのが学校教育における英語教育の目的であるとする。このような実用論と教養論の果てしない論争は、明治時代以来ずっと

とおこなわれてきて、今も続いている。

しかし、この2つの考えは、学校教育における英語教育を考えたとき、どちらも正しい考え方であるというべきであろう。学校教育の根幹をなすものは、生徒の人格の形成を図るというのが大目標であるから、教育の一環として英語を教える場合には、教養論のいう英語学習をとおして人格の形成を手助けしたり、生徒がいろいろな国の人々のものの考え方を学ぶことをとおして、自らの生き方を考えるのは当然のことである。一方、さきに述べたように、地球語としての地位を固めている英語の実践的コミュニケーション能力を身につけることは、さまざまな知識を得る手段になる。しかし、もし、実用的なコミュニケーション能力が身についていなければ、英語をとおして異文化に生きる人々とのコミュニケーションができないわけであるから、そもそも、異文化理解をとおしての人格の形成という教養論の目標も達成できないのである。

## 2. 学習指導要領

### 2.1. 学習指導要領とは

日本の中学・高等学校の英語教育は、ほぼ10年ごとに改訂される学習指導要領に基づいてなされる。最近では、1998年に中学校の、翌年には高等学校の学習指導要領が改訂された。学習指導要領は、文部科学省が教師にたいして、学習指導目標の設定や指導方法の決定、教材、評価などの手引きとして告知する文書のことであるから、学校における英語教育は学習指導要領に基づいておこなわれるというのが前提である。学校でおこなわれる英語教育と巷の英会話学校で教えられる英会話のクラスとの根本的な違いは、学校英語教育は学習指導要領に基づいておこなわれているという点にある。つまり、学習指導要領は毎日の授業の基礎になるものである。

学習指導要領は、法律の文章のように、骨格だけを示したものである。作成者である文部科学省が協力者の力を借りてそれに解説を加え、指導するうえで教師の参考となる事項をまとめたものが『中学校学習指導要領解説—外国語編一』と『高等学校学習指導要領解説—外国語編一』である。

実際に、『中学校学習指導要領』(本書の付録を参照)を見てみよう。第1章「総則」では、教育課程編成の一般方針、必修教科、選択教科、授業時間

## 第Ⅰ章 英語教育の目標

数の取扱い、指導計画の作成にあたっての配慮事項などが書かれている。第2章「各教科」の第9節に「外国語」があり、その第2「各言語の目標及び内容等」の中で英語の目標、内容、指導計画の作成と内容の取扱いが書かれている。「高等学校学習指導要領」(本書の付録を参照)では、第2章「普通教育に関する各教科」の中に、第8節「外国語」というセクションがあり、第1款「目標」、第2款「各科目」、第3款「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」という構成になっている。

### 2.2. 新学習指導要領の特徴

1998年に中学校の、翌年には高等学校の学習指導要領が改訂された。ここでは、新しい学習指導要領の全般的な特徴を見ていくことにしよう。高等学校の学習指導要領は、中学校のそれを踏まえたもので、同じ精神をいっそう深めたものになっている。

まず、今回の改訂の最大の特徴は、中学校、高等学校とともに、外国語科が必修になったことであろう。中学校において外国語が必修になったのは今回が初めてであり、外国語のうち、英語を原則として履修させることとしている。これは、国際化がますます進展している状況では、外国語を使って日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような能力を身につけることが必要であるとの認識に基づいている。原則として英語を履修させる理由は、英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を踏まえたものである。

次に、外国語科の目標は、中学校では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」となっている。これは、高等学校においても、その精神はほぼ同じである。まず、外国語の学習によってその言語のもつ仕組みがわかるようになること、さらには、その言語の背後にある文化への理解を深めることの重要性を述べている。コミュニケーションを図ろうとする積極的な態度とは、これまで、たとえ、基本的な知識を身についていても、それを活用できなかったのは、自分の考えを相手に伝えようとしたり、相手の考えを理解しようとしたりする態度の育成が十分でなかったからであるという認識に基づいたものである。最後の「実践的コミュニケーション能力」と

は、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力」のことを示している。

「実践的コミュニケーション」を重視するということと関連して、これまで以上に、「聞くこと」と「話すこと」を重視していて、それを扱うオーラル・コミュニケーション重視のクラス運営を求めている。また、言語の使用場面と働きを強調している点も注目すべきである。たとえば、言語の働きの1つである「初対面の人の名前を尋ねる」を扱う場合、“May I have your name?”というのが適切なのか、“What’s your name?”でよいのか、場面に応じて選択させるなど、コミュニケーション活動を展開することが要請されている。

### 3. コミュニケーション能力とは

中学校、高等学校の学習指導要領とともに、「実践的コミュニケーション能力」の養成が目標であると書かれている。高等学校の指導要領解説には、「実践的コミュニケーション能力」とは「外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図ることができる能力である。すなわち、外国語を使って、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりして、通じあうことができる能力である」と説明されている。

ここでは、今の英語教育のキーワードの1つである「コミュニケーション能力 (communicative competence)」ということについて考えてみよう。普通、コミュニケーション能力には文法能力 (grammatical competence), 社会言語能力 (sociolinguistic competence), 談話能力 (discourse competence), 方略能力 (strategic competence) の4つの能力の側面があると考えられている。

文法能力とは、言語体系の能力のことである。音声、語彙、文法を理解し、語句や文を作る能力のことである。書きことばにおいては、綴り、句読点の知識などもここに含まれるであろう。

社会言語能力とは、言語が利用される社会的文脈を理解して言語を用いることができる能力である。たとえば、場面にあわせた発話の適切性や丁寧さの度合いなどが理解できなければならない。同じ依頼表現でも、親し

## 第Ⅰ章 英語教育の目標

い人に頼むのか、普通のつきあいの人に頼むのか、目上の人には頼むのかでは、用いられる表現は異なってくる。書きことばでも同様のことがいえる。公式の手紙、友達への電子メール、ビジネスにおける報告書などを形式や文体を変化させて書きわけることができる能力である。

談話能力とは、メッセージを効果的に伝えるために、意味のある全体のテキストを組み立てる能力のことである。言語を用いてコミュニケーションをおこなう場合、通常、複数の文を連ねた形でおこなわれる。その際、文と文を効果的に結びつけて、よいテキストを構成している場合、結束性(cohesion)があるというが、ここでは、文と文をつなげる働きをするものをいくつか見てみよう。

- (3) a. Mammals are very useful to man. They give man meat and milk for food.
- b. They quarreled with the landlady. The argument was about when to have breakfast.
- c. A gun lay on the table beside the guard. He checked nervously that the weapon was within easy reach.
- d. My hobby is collecting stamps. I am also interested in collecting old coins.

(a) では、文脈から “they” が、ある事物に言及していることがあきらかであり、そのことが談話の結束性を保証している。(b) では、“the argument with the landlady” の “with the landlady” の部分が省略されていると解釈され、そのことによってテキストの結束性が保証されている。(c) では、“the weapon” は “a gun” を指し、類似の語彙表現による結束性である。最後に、(d) は、追加をあらわすつなぎことばである “also” によって文をつなげている。

まとまったテキストを作るものは結束性だけではなく、意味的なまとめたりも必要である、これは一貫性(coherence)とよばれるもので、指示とか省略という文法的なことというより、意味に関することがある。

方略能力とは、コミュニケーションがうまくできない場合に、うまく切りぬける能力のことである。たとえば、スピーチングにおいて、単語を知らない場合の伝達方法の工夫、たとえば、近似表現でいい換えたり、わか

## 現代の英語科教育法

らない単語を相手に質問して教えてもらったりする助言要請の能力などが含まれる。コミュニケーションはつねにスムーズにおこなわれるとは限らない。相手のいうことがわからなかつた場合、聞き返して確認するという作業が必要になる。わからないことをそのままにせず，“Pardon?”, “I am sorry, but I can't hear you.”, “Would you please say that again?”などの表現をうまく使って、コミュニケーションを継続させる能力は方略能力の1つである。

### 4.まとめ

学校教育における英語教育の基礎になるのが学習指導要領である。しかし、その精神を活かして、実際のクラス運営にあたつて問われるのが教師の力量である。その基礎にあるのが、何よりも教師の英語力、そして、英語に関するさまざまな基礎知識、教授法などの知識とその技術の修得である。

Q & A その1

Q：自分が英語教員に向いているかどうかはどう判断したらいいですか。

A：英語教員になるためには、4技能にわたって優れた英語運用能力を有することが必要なのはいうまでもありませんが、まず、適性診断を兼ねた次のようなチェックリストで確認してみてください。

- ① 教えることが好きである。
- ② 人に興味をもって接することができる。（人が好きである。）
- ③ あかるい性格であるとよくいわれる。
- ④ 人前で大きな声をだして話すことが苦にならない。
- ⑤ ユーモアをもって話すことが得意である。
- ⑥ 皆を引っ張っていくタイプである。
- ⑦ コツコツ努力することが好きである。
- ⑧ 相手の立場に立って物事を考えることができる。
- ⑨ 協調性がある。

以上のうち5つ以上が当てはまるようであれば、教員としての適性は高いといえるでしょう。

少数の限られた生徒だけを相手にする家庭教師や塾講師とは異なり、いじめ、不登校、さまざまな家庭環境の生徒など多様な課題を抱える公教育において、遭遇する困難は多いかもしれません、教員を志望した最初の動機はいつまでももちつづけてほしいものです。

(石黒 昭博)

## 第 II 章

### 英語に関する基礎知識

英語の学習者が英語がどんな言語であるかを知らねばならないのは当然のことであるが、この場合、「知る」といっても、英語の運用上の知識、つまり、発音・文法・作文力などという実践的な知識をもっているだけでは不十分である。どんな言語にも、その言語を育んできた文化的背景、すなわち、歴史、国民性、発想、風俗習慣上の特異性などが存在しているため、英語に関する文化的背景についての知識も必要となる。

英語の教師として教壇に立つ者には、英語の実践的な知識とこれを支える英語の文化的・背景的な知識の両方が、教授法の技術の修得とともに必須となる。このために、大学や短期大学において、教職科目の必修科目として、「英語音声学」、「英会話」、「英作文」、「英語科教科教育法」などの実用的科目のみならず、「英語史」、「英米史」、「英米文学史」、「英語学概論」、「英米文化論」などの文化的・背景的知識を与える科目もまた設置されている。

ここでは、英語教員を目指す者にとって、「基礎知識」に属すると思われる事項について解説してみよう。

#### 1. 英語の背景

英語は、他の多くの言語に比べて、比較的若い言語であるといえる。英語は、5世紀に現在の北部ドイツからゲルマン語のサクソン語の方言としてブリテン島にもたらされた。その話し手は、アングル族、サクソン族、ジューート族で、それぞれは、インド・ヨーロッパ語族の西ゲルマン語に属する、類似した別々の方言を使用していた。そして、古期英語 (Old English) として定着するのは、おおよそ、8~11世紀のあいだで、この期間に、ヴァイキングとの交渉を通じて、ゲルマン語に属する他のスカンジナ